

変革期の文学

本田 錦一郎 編著

北海道大学図書刊行

変革期の文学

本田 錦一郎 編著

北海道大学図書刊行会

《執筆者紹介》

奥山次良（おくやま じろう）

1951年北海道大学卒 北海道大学文学部教授 社会思想史

本田錦一郎（ほんだ きんいちろう）

1951年北海道大学卒 北海道大学文学部教授 イギリス文学

中山毅（なかやま たけし）

1955年東京大学卒 北海道大学文学部助教授 フランス文学

中村健之介（なかむら けんのすけ）

1962年国際基督教大学卒 北海道大学文学部助教授 ロシア文学

亀井秀雄（かめい ひでお）

1959年北海道大学卒 北海道大学文学部助教授 日本文学

渋谷寿一（しぶや じゅいち）

1953年北海道大学卒 北海道大学文学部助教授 ドイツ文学

片山厚（かたやま あつし）

1953年北海道大学卒 北海道大学文学部助教授 イギリス文学

中野美代子（なかの みよこ）

1956年北海道大学卒 北海道大学文学部助教授 中国文学

変革期の文学

1976年3月25日 第1刷発行

¥ 2000

編著者 本田 錦 一 郎

発行者 安 井 勉

発行所 北海道大学図書刊行会

札幌市北区北8条西8丁目 北大生協会館内 (☎060)
Tel 札幌 (742) 2308・振替小樽 17011

印刷・製本 興国印刷株式会社

© 1976 本田錦一郎

1090-01033-7786

目次

I	変革について……………	奥山次良	一
II	歪んだ球体…………… ——ジョン・ダンをめぐって——	本田錦一郎	四
III	『危険な関係』と女性問題……………	中山毅	一七
IV	ドストエフスキーの「地下室」の男……………	中村健之介	二四
V	毒婦と驕女……………	亀井秀雄	二九
VI	カフカ文学の出発……………	渋谷寿一	三〇
VII	自己への凝視とアメリカの夢…………… ——ユージン・オニールから——	片山厚	三七
VIII	中国近代読者論…………… ——その成立・変遷・崩壊——	中野美代子	三三
	あとがき……………		

I 変革について

奥 山 次 良

私たちは、「変革」についてしばしば、また多くのことを語っている。その場合、変革とはいったい何を意味しているのであろうか。ときにそれは、極度に割り切った思想的図式に誘われる政治的興奮であったり、またときにそれは、政治的諸党派がもくろむ統合のための政策上のスローガンであったりもする。しかし、おそらくいま私たちにとって大切なことは、すでに教条化し硬直している変革の概念を放棄して、現代批判のよりどころを新たに求め、そのありかについて感性的に習熟していくことであらう。けれども、いまここでそれについて、性急に問うことが適當であるとは思われない。むしろ、そのような習熟については——それについてのみではないにしても、このあとの諸章が読者に明らかにするであらう。本章においては、もっぱら変革に関わるいくつかの論点についてのみのべることにしたい。

さしあたり、形式的にでもあれ変革の意味を知ろうとすれば、その手掛りとなるのは、これに

類似したいくつかの言葉である。それには、たとえば、変化、変動、移行、過渡、改善、改良、改造、改革、進歩、進化、進展、発展、激変、転換、革新、維新、革命などがある。これらの言葉は、それぞれに、「変革」が意味するところといく分か重なり、いく分かそれからずれているが、このように言葉を並べてみれば、そこからある特徴が浮び上ってくる。それは、たとえば、変動、移行、過渡、進展などの言葉がおおむね事態の成りゆきを言いあらわして、それらが、この成りゆきの渦中にあるひとつとにとってみると、やむなく立ち合わされているものとして受けとられるのに対して、改善、改革、改造、革命などの言葉が、事態に対するひとつとの意図的な働きかけおよびその成果を言いあらわしている、ということである。変革という言葉を口にするとき、私たちは、このような語意の二つの側面——変わり革まる事態と変え革めようとする意志——のうちのいずれか一方を、あるいはその双方を思い浮べているであらう。私たちは、「変革」が、事態的、客体的であるとともに、意図的、主体的でもあることをすでに理解しているのである。

この序章において、私たちは、このような理解を手引きにしよう。すなわち、変わり革まる事態（変革の事態）、この事態が経過する時間の意識（歴史意識）、この意識を主導する変え革めようとする意志（変革の意志）、この意志と事態との関係（実践）という順を追って、私たちは、変革に関わるいくつかの論点をとりあげたい、と思う。しかし、変革の二つの状態のいずれが支配的であ

I 変革について

るかに応じて、変革期の意識も異なってくると考えられるから、はじめにこの意識の諸様相についてふれておく。

1 変革期の意識

それにしても、変革期の意識類型をあますことなく体系的にあげることは、不可能である。類型の作成およびそれらの相互連関の確定は、すぐれて文芸研究家のまた歴史家の課題であろう。従ってここでは、変革期における意識の諸相について、そのいくつかを例示するに止めた

い。

変革がおのずから意識されてくるとすれば、それは、たいてい、事象についてのかなり一般的に通用していたひとびとの見当がはずれはじめるときである。このようなはずであったし、このようなはずである、そしてこのようになるはずである、という思考においても行動においても自明なものともみなされていた見当——それはまた処世上の実践知 “*prudentia*” である——が、その効力を喪失していく。そのようなとき、国家、宗教、文化などの全般的形象のあるがままの、あるいはあるべき姿はかげりを帯び、さらには見失われて、そうなれば、それらのただ副次的、派生的な諸形態、諸形式ばかりがいたずらに錯綜し、生活上のほとんどの事柄がその源泉から断ち切れ、それらがかつて備えていた適正な意味を失い、時代、社会を構成するある種の要素が

過度にその勢力を伸ばし、他の要素の方はいちじるしく抑圧されてしまう。

そのような「見当はずれの意識」に対抗して、いまは過ぎ去った古き良き時代に改めて照準を求める主張が現われもする。けれども、この「復古の意識」にはじめから欠如しているのは、この復古意識がよりどころにするものを、一般の見当を崩していく当のものがまさしくすでに掘り崩している、ということである。というのも、一般の見当は、おのずからに与えられていたのではないからである。それは、教育と経験とにおいて、伝承と伝統の習得を通じてつちかわれるものであった。ヨーロッパ近代のはじめに例をとれば、この習得は、とりわけ、文学、美術、古典研究などのいわゆるフィロロギーの学問において果たされるべきものであった。言語の用法を詳細に理解し、テキストを正確に解釈しようとする努力と訓練とによって、ひとびとは、自らを拘束するようにみえるけれども本当はたまさかのものであるかもしれない状況の諸制約を乗り越えて、解釈されるテキストが、もっと一般的には文化の伝統が告知するある文芸上の公共世界を心得るようになる。解釈し理解しようとはむきに努める者は、そのいとなみにおいて、この心得をただし、深め、積み重ね、自らの生を、その個性性を棄てて、この公共世界につなぎとめていく。そのような公共世界へのたえまない繋留から、「教養」が、あるいは人間的なものについての「共通感覚」“*sensus communis*”が産れてくる。ひとびとが、事に臨んでよりどころとする一般の見当とは、このようにして育成されたのである。そうしてみれば、一般の見当の喪失を産み

出す事態は、つとに、古典的伝統——古き良き時代への素朴な回帰を拒絶している。

変わり革まる世の姿がいよいよ意識されるようになれば、その時代のさ中に立つひとびとが、もはや確固とした生の基準を求めるすべもないように思い、自らの生のふたしかをいわば直下にそのまま生の真実として捉え返すことも起ってくる。よく知られているように、崩れ、流れ、止まるところを知らない人間的生の趣きは、昔から多くの思想家の主題であった。そしてそれらの思想に共通する「無常の意識」は、たいがいその時代の動向に應ずるものであった。たとえば、同一の教養圏の全民族ないしは多数の民族を襲う全般的危機が到来し、しばしばこれに外部からの侵襲が結びついてゆくような場合、現実の変容はおそるべき速さで進行する。平常であれば、数世紀を必要とする事態の展開が、数年、数カ月のうちにまるで幻のようによぎり、消えてしまう。その変転の抗いがたさ、また速さ、そして過ぎ去りゆくものに対する激しい執着から、無常の意識が生れる。世ははかなくうつろいやすい、と断定できるといふのも、そのように信ずるひとびとが、むしろ永遠なもの、持続するものを希求しながら、しかもそのような希求が成就するはずもないことをよくわきまえているからであらう。そのように知った上でひとびとは、転変する世の有様を、それを常態とする恒常的なもの、不動なものとして捉え返そうとする。乱世における「悟り」、「不動の心」(アパテイア)のすすめは、無常の意識についてのこのような反省を言いあらわしている。

ときに、この恒常的なものが、「運命」としてひとびとの心のうちに映現する。しかし運命とは何であろうか。あるひとの内発的欲求に対して、もともとそれとは関わりなく経過する外的事象がたまたま決定的な影響を及ぼす場合、その事象は、そのひとにとって運命的である。たとえば街角であるひとと出会う。それはまさに偶然にすぎない。かねがね会いたいと願っていたひととそのような風に出会うとしても、事情はさほど変わらない。けれども、この出合いが、そのひとの人生の転機となるほどの深刻な事件になるとすれば、それは、運命的である。現われ、常なく過ぎ去っていくさまざまな出来事が、とあるとき、ひとびとの内的な生に関わり合つて、その流れの方向を大きく変えてしまうような意義あるものになるとき、転変する事態の動向は、運命として仰がれ、それへのひたむきな聴従が要求されるであろう。

そのような運命の意識のうちに、変わり革まる事態と変え革める意志とのある予感に満ちた接点がある。この予感がいやますますに、事態の動向はたしかになお抗いがたいにしても、それは、もはやたんにやむをえないものではなくってくる。事の成りゆきが、人間の意志を挑発しはじめる。やがて時が熟し、諸条件が整えば、いつもであれば互いに知り合うこともない多様なひとびとの間に、また多様な民族の間に意志が通い合い、なくてはならないただ一つのこと、ひとびとはたちまちいっさいを知る。——すべてが、今とは異なった具合にならなければならない、と。暗くただよう運命の意向が、いまや明晰な「革新」を目指す人間の意志に転質する。たとえ

ば、農民戦争のときがそうであった。何百という小さな借領地で同時に、農民は心を一つにしていた。フランス革命のときにしても、知識人たちは、思想上きわめて同質的であった。

2 変革の事態

変革期の意識は、その局面に応じて、「見当はずれの意識」、「復古の意識」、「無常の意識」、「運命」、「革新」など、さまざまな様相を示すが、これらの意識形態に関わり合う事態を捉えるためのいくつかの指標がある。

(1) 「範囲」 変わり革まる事態の及ぶ範囲が、特定の地域、民族、社会、国家などに限られる場合もあるし、他に波及する場合もある。また、いくつかの地域において別々に生じた事態が、のちに連関し合ったり、またはじめから連動していて複数の地域で多発する事態もある。

(2) 「時間」 変わり革まる事態の経過が数世紀にわたる場合もあるし、数年で落着する場合もある。また、経過する時間のこのような「長さ」、「短さ」と併せて、事態の進み具合が、「速い」場合、「遅い」場合も考慮されなければならない。たとえば、事態の推移が短期間に終る場合であっても、変わり革まるその有様の進み方が、常にめざましいとは限らない。さらに、事態が、その発生時から「たえまなく」進んでいくのか、それとも「突発的に」起り、しばらく間をおいてくり返されるのかについても注目されなければならない。突発的なくり返しが長期にわたって

生じ、その結果、事態がいちじるしい速さで変容することもある。

(3) 「強さ」と「深さ」 事態の有様が、それ以前と比較してみれば、明らかに異なっているほどに強い変わり方をする場合と、それほど変わらない場合とがある。この変革の強さは、またその深さとも関わっている。たとえば、従来の社会体制内部に止まる程度の深さで、変革の強さが働くこともあれば、体制そのものがゆるがされる程度に深く社会が変わり革まることもある。

(4) 「激しさ」 変革が、広くか狭くか、長くか短くか、速くか遅くか、強くか弱くか、深いか浅くか、たえまなくか突発的にか、進行するとき、変革を規定するこれらの条件のうちのどれが事態にとって決定的であるかに応じて、この変革の激しさ、おだやかさが定まってくる。

なお、誤解をさけるために指摘しておくなら、これらいくつかの指標によって捉えられる事態のうちのどれが私たちににとって有意義であるのかについては、あらかじめ一義的な尺度が与えられていないわけではない。たとえば、短期間であるよりも長期にわたる方が、また局部的であるよりも全般的である方が、私たちににとっての変革の意義は大きい、といちがいには言い切れないのである。たとえばフランス革命は、短期間の出来事であり、その範囲にしても局部的であったけれども、いうまでもなくその現代に対する意義はきわめて大きいのである。

さて、どのように変わり革まるかについてのひとつの具体的な例示を、私たちは『共産党宣言』の中の一文のうちにみることができる。この叙述は、近代ヨーロッパ社会にみなぎる変革の核心

をついているという意味においてもきわめて重要である。長くなるが引いておく。

自分の生産物の販路をつねにますます拡大しようという欲望にかりたてられて、ブルジョア階級は全地球をかけまわる。どんなところにも、かれらは巢を作り、どんなところをも開拓し、どんなところとも関係を結ばなければならぬ。

ブルジョア階級は、世界市場の搾取を通じて、あらゆる国々の生産と消費とを世界主義的なものに作りあげた。反動家にとってはなはだお気の毒であるが、かれらは、産業の足もとから、民族的な土台を切り崩した。遠い昔からの民族的な産業は破壊されてしまい、またなおも毎日破壊されている。これを押しつけるものは新しい産業であり、それを採用するかどうかはすべての文明国民の死活の問題となる。しかもそれは、もはや国内の原料ではなくもつと遠く離れた地帯から出る原料にも加工する産業であり、そしてまたその産業の製品は、国内自身において消費されるばかりでなく、同時にあらゆる大陸においても消費されるのである。国内の生産物で満足していた昔の欲望の代りに、新しい欲望があらわれる。この新しい欲望を満足させるためには、もつとも遠く離れた国や気候の生産物が必要となる。昔は地方的、民族的に自足し、まとまっていたのに対して、それに代ってあらゆる方面との交易、民族相互のあらゆる面にわたる依存関係があらわれる。物質的生産におけると同じことが、精神的な生産にも起る。個々の国々の精神的生産物は共有財産となる。民族的個性や偏狭は、ますます不可能となり、多数の民族のおよび地方的文学から、ひとつの世界文学が形成される。

ブルジョア階級は、すべての生産用具の急速な改良によって、無制限に容易になった交通によって、すべての民族を、どんなに未開な民族をも、文明の中に引き入れる。かれらの商品の安い価格は重砲隊であり、これを打ち出せば万里の長城も破壊され、未開人のどんなに頑固な異国人嫌いも降伏をよぎなくされる。かれらはすべての民族をして、もし滅亡したくないならば、ブルジョア階級の生産様式を採用せざるをえなくする。か

れらはすべての民族に、いわゆる文明を自国に輸入することを、すなわちブルジョア階級になることを強制する。一言でいえば、ブルジョア階級は、かれら自身の姿に型どって世界を創造するのである。

この一文には、どのように変わり革まるかについてのみならず、何が変わり革まるかについても、言及されている。それは、民族あるいは国家の生産様式およびそれを土台とする物質的、精神的秩序である。しかし、ここでは唯物史観のテーゼに立ち入らずに、変わり革まる事態に関する別の観点からの見方を紹介しておきたい。

ダニエル・ベルは、脱工業化社会の特性について次の五つの点を指摘している（『知識、技術が作る未来社会』）。これらの特性は、これまでの工業社会の変わり革まる事態に対するかれの見解をあらわすものである。

(1) サービス経済の創出 今日なお世界のかなりの国々は、農業、鉱業、漁業、林業にたよって、天然資源を基礎とする経済をいとなみ、若干の先進国においてのみ、製造業が経済の中心を占めている。しかしやがてこれらの先進国は、より多くの労働人口をサービス部門にふり向けなければならないであろう。脱工業化社会を特徴づける第一の側面は、通商、金融、運輸、保健、レクリエーション、研究、教育、行政などのサービス部門を主軸とする経済である。

(2) 専門家階層および技術者階層の増大 工業社会においては半熟練工が、労働人口の中で

最大の職業部分をなしている。しかし、職場についても、仕事の種類についても、脱工業化社会においてはその形態が変わってくる。ブルーカラーの労働者数をホワイトカラーのサラリーマンの数が上回るようになる。とりわけ、大学教育を必要とする専門的職業、技術的職業にたずさわる者の数の増加率が、労働人口全体の増加率に較べていちじるしく大きいものになっていく。

(3) 理論的知識の優位 工業社会は、財貨生産のための機械の組織体であり、この点では、資本主義、社会主義のいずれもその変形にすぎないが、これに対して脱工業化社会は、理論的知識を中軸に組織される社会である。ここで新しい点は、知識そのものの性格の変化である。経験主義に対して理論が優位を保ち、知識は記号化されて、記号の抽象体系という形態をとるようになる。

(4) 自立的な技術の成長可能性 はっきりと意識された政策、計画が、社会形成の中心をなす要因として表立ってくる。そのための予測手段、計画技術は、自立的に展開し、新しいテクノロジーのフロンティアを切り拓き、生産性を拡大する。

(5) 新たな知的技術の創出 工業社会における機械技術と対比すれば、リニア・プログラミング、システムズ・アナリシス、情報理論、決定理論、ゲームの理論、シミュレーションなどの新しい知的技術の創出が、脱工業化社会の新しい性格を際立たせている。これらの技術にコンピュータを結び合わせるなら、各種のデータを大量に集積し、操作することができ、それによっ

て、社会、経済問題については、いっそう完全な知識がえられるようになる。

要するに、ベルは、マルクスと異なつて、変わり革まる事態を「経済」のうちにはなく「技術」のうちに見ようとするのである。それにしても、ベル、マルクスいずれの場合にも、変革は、社会を全体的にか部分的にか規制する機能に関連づけられている。そのような機能を構造と呼んでよいであろう。いいかえれば、一般的にまた結局のところ、変わり革まるものは社会構造である。この構造については、つとに、富永健一氏が適切な定義を与えている。すなわち、「社会が構造をもっているということの意味は、成員によつて受け入れられ、内面化され、サンクシヨンによる裏づけを与えられた行動規則、すなわち制度化され正当性を付与された規範が成立しているということである。これを一語にしてあらわすならば、社会が構造をもっているというのは、制度が成立しているということなのだ、といつてもよい。制度化された規範は、(一)体系内の種々の役割に対して人員を配分し、(二)個々の成員の役割行動にとつての用具となりまたそれに対する報酬となる物財ならびに関係財の所有を配分する。だから、社会構造とは、制度化された規範による人員配分および所有配分の、持続的な配置として定義づけられる」(『社会変動の理論』)。ちなみに、ここで言われる関係財とは、用具としては「社会的勢力または権力」、報酬としては「社会的威力または威信」を意味している。

この定義によつてみれば、登場しつつあるとベルが考える脱工業社会の五つの性格のうち、(1)

と(2)は人員配分に、(3)、(4)、(5)は所有配分に関わるものであり、変わり革まる事態の核心となる「規範」については、生産による支配から技術による支配への転換として捉えられていて、変革を、資本主義的生産様式から社会主義的生産様式への転換とみなすマルクスの場合といちじるしい対照をなしている。

3 歴史意識

いうまでもなく、変わり革まる事態は、時の流れの中にあり、時とともに経過する。しかし、この経過のうちにあるひとびとが、常にこの時の流れを明確に、まして全体として意識しているわけではない。たとえば、世をうつろいゆくものと見るひとびとは、たいがい、変転する個別の現象に心を留めて、それらとの関わりで時を捉えるのであり、時そのもののあり方を注視することとは稀である。けれども、変わり革まる事態が、ただ革まるがままに過ぎ去っていくのではなく、それが、変え革められるべき事態として、ひとびとの自覚的行動に媒介されるようになるとき、それまで事象の背後におかれていた実体的時間が、人間的生の主体的時間として理解され、思考の主題とされてくる。歴史意識がこうして生れてくる。

思想史において私たちがしばしば見受ける時代区分の試み、あるいは発展段階論が、そのような意識のひとつのあらわれである。たとえばこのような試みとして、コントの神学的段階、形而